

# 聖護院による山伏組織化についての再検討

萩島 聖美

## はじめに

修験道研究の重要なテーマの一つとして、山伏の組織・編成に関する問題が挙げられる。山伏の組織として、近世には大きく二派がみられた。聖護院を棟梁とした本山派、醍醐寺三寶院を棟梁とした当山派である。当山派については、既室町時代には三寶院流の山伏の活動が確認でき、また醍醐寺三寶院による山伏統制が行われ始めていたという指摘がある<sup>(1)</sup>。一方で、本山派に對峙し得る三寶院を頂点とする当山派が形成されたのは近世になってからという指摘もあるが、後者が一般的な見解とされている傾向にある。一方の本山派は、当山派よりも早い十四世紀末～十五世紀中葉のころ、聖護院道意・滿意らによってその実体が形成されたという<sup>(4)</sup>。

もともと山伏は、寺内において禪衆・行人・堂衆身分として、学侶・学衆・衆徒などの下で活動していた<sup>(5)</sup>。紀州根来寺は、「紀州根比山者別当三寶院也、東寺末寺、然而山伏共聖護院之下方也（後略）」<sup>(6)</sup>といわれ、真言宗寺院として東寺の末寺であるが、「山伏」は「聖護院之下方」であった<sup>(7)</sup>。また「学衆方上百人号」<sup>(8)</sup>「学侶」、此末衆為「大將分」<sup>(9)</sup>「召」仕山伏方「云々」というように、寺内において学衆の下で「山伏方」という組織を形成し、組織的に活動していたことが窺える。

このように、学衆の下で組織的に存在していたことは、これからみていく摂津国勝尾寺や近江国観音寺などからも確認

することができる。よって、本山派・当山派といった山伏組織は、寺院に所属している一部の者を全国的に組織化していったことになるのである。<sup>(9)</sup>

禪衆・行人・堂衆の一員として個々に活動する山伏や、根来寺のように「山伏方」として組織的に寺内で活動している山伏などを対象として組織化することは、山伏に対して上部権力が誕生することを意味し、以下に挙げる二つの問題が生じると考える。一つは、山伏の所属する寺院にも権力関係が及ぶことが考えられよう。二つには、その寺院を末寺として位置づけている本寺に対する影響がある。山伏編成が波及的に影響を及ぼすであろう二つの問題を、以後本稿では「寺内秩序」、「寺院間秩序」と表現する。

このような視点で、本山派編成の過程を明らかにし、それが既存の寺院秩序へ及ぼす影響について論じた代表的なものとして、長谷川賢二氏による一連の研究がある。<sup>(10)</sup> 長谷川氏は、近江国坂田郡所在の観音寺に残る『観音寺文書』<sup>(11)</sup>を題材として、聖護院と観音寺の関係を詳細に追究した。観音寺は応永年間（一三九四—一四二八）以降、地頭大原氏の干渉を受けており、観音寺の本寺である山門はその排除に腐心していた。そのほか、観音寺に関与する上部権力者には聖護院があり、観音寺は、聖護院を大原氏と並ぶ寺外権力者として捉えている。<sup>(12)</sup> しかし聖護院は、山門から危険視されることはなかった。この点について長谷川氏は、山伏は「その存在が山門に意識されることのない、いわば本末関係の『間隙』的存在」であり、「必要視されなかった」<sup>(13)</sup>ため、それを囲い込む聖護院門跡側の動向は既存の本末関係の秩序に抵触するものではなかったと指摘している。

だが、これからみていくように、聖護院とのつながりを持つのは必ずしも山伏だけではなかったという点を考えると、山伏の特異性のみを理由に、何故聖護院が寺院間秩序に抵触せずに組織化することが出来たのか、という問題を解決することはできないだろう。また、組織化の対象を山伏に限っていたとしても、聖護院による支配のあり方次第で、大原氏同様に所属寺院やその本寺に及ぼす影響も大きくなるに違いない。つまり聖護院の支配のあり方を考えること抜きに、聖護

院による山伏組織化が可能であった理由を明らかにすることはできないのではないだろうか。よって、聖護院が支配対象とする者の性格に注目するだけではなく、聖護院の支配そのものの性格も考慮しなければならないと考える。

ところで、聖護院下の山伏は、大きく熊野先達と寺内山伏集団とに分けられるのではないかと考える。先にみた根来寺山伏については、管見の限り熊野先達が存在したという史料は見当たらない。また、勝尾寺山伏と熊野先達の関係について小山貴子氏は、熊野山側が勝尾寺の「小池坊・小坊・漆本坊」を先達として認識し、契約関係を結んでいることから、山伏衆中の山伏は、これら三坊の所属として熊野と契約していると指摘している。<sup>(14)</sup>だが、勝尾寺山伏が拠点とする坊としては榎本坊も考えられ、<sup>(15)</sup>山伏の所属する坊は三坊に限られたことではないのか。よって、勝尾寺には熊野先達として把握されない山伏も存在していたと考える。つまり聖護院下に入った寺内山伏集団は、その構成員すべてが熊野先達であったとは限らないであろう。

しかし先行研究では、寺内山伏集団同士のつながりについて、熊野先達を中心とした在地山伏結合とされたり、また、聖護院による山伏組織編成を熊野先達組織化と捉えられてきたように、熊野先達としての性格を重視しすぎている傾向がある。勿論、聖護院は熊野三山検校として全国の先達の総括者であり、山伏組織化の対象の多くを熊野先達が占めているのは事実である。ただ、根来寺の例でみたように「山伏方」といった寺内一組織である山伏集団が、一様に、熊野への引導を主たる活動の一つとしていたと考えるのには注意が必要であろう。寺内の一組織全体が聖護院下に入ったとしても、必ずしもそれは熊野先達としての義務を聖護院に対して負ったことを意味しないのではないだろうか。

熊野先達と聖護院のつながりには、先達職の補任・解任のほかに、熊野参詣ごとの上洛御礼と、檀那場に年毎に賦課される上分の納入といった経済的収益が挙げられる。<sup>(16)</sup>だが、寺内山伏集団と聖護院の間には定期的な上納が行われるなどの関係は見当たらない。このことは、熊野先達と寺内山伏集団に対する支配形態が異なっていたことを示している。先行研究では、山伏に対する聖護院の支配について特に違いを見出してはおらず、同一のものと考えられているが、組織化の対

象には熊野先達と、寺内一組織として存在する寺内山伏集団が想定され、両者に対する聖護院の支配形態は異なるものであったと考える。そこで本稿では両者を区別した上で、聖護院の山伏に対する支配について明らかにし、寺内・寺院間秩序について再検討を試みたいと思う。

以上の問題を踏まえて本稿の課題を設定すると、次のようになる。

- (1) 熊野先達・寺内山伏集団に対する聖護院の支配の様子を明らかにする。
- (2) 寺内山伏集団を聖護院が組織化することができたのは何故か。寺内秩序と寺院間秩序に対する影響といった観点から、それぞれ考察を試みる。

## 第一章 聖護院支配の様相

### 第一節 熊野先達に対する支配

前述のように、聖護院による熊野先達支配については、聖護院が先達補任権、熊野参詣の際の上洛御礼・上分の御礼といった権益を有していたことが既に明らかにされている。しかし、寺内山伏集団と比較する意味で、その従属の度合いについて取り立てて言及されることはない。以下、本節で取り上げる事例の多くは、先達支配をめぐる熊野と聖護院の支配交代過程といえるか否かといった論点で、新城美恵子氏・石倉孝祐氏・長谷川賢二氏<sup>(17)</sup>らにより詳細に研究がなされているが、ここでは、聖護院は熊野先達に対してどのような姿勢で支配を行っていたのか、熊野先達の聖護院に対する従属の度合いについて考察していく。次の史料では、熊野先達の訴えに応じる聖護院の姿が確認される。

【史料一】

上田野檀那之事、自「先規」、為「其方之計」、御坐候之処、近年背「其下知」人躰候由被「申候。曲事候。於「以後」者、堅可「有」成敗「候。恐々謹言。

〔異筆〕  
「文明十六」

八月廿日

慶儀（花押）

八槻別当御房<sup>(20)</sup>

慶乗（花押）

差出人の一人である慶儀は「若王寺催人」<sup>(21)</sup>であり、もう一人の慶乗は若王寺乗々院の意を受けて奉書を出していることが他の史料から確認できる。<sup>(22)</sup> よって、彼らは若王寺乗々院に仕える者と考えられる。この文書は奉書の形式をとっていないが、真の発給主体は乗々院であると考ええる。乗々院は、聖護院の院家であり、三山奉行として門跡の意思執行機関の役割を担っていたという。<sup>(23)</sup> つまり、乗々院から出される奉書は聖護院の意思を表したものと考えられるので、以後本稿で挙げる乗々院が発給主体の史料は、聖護院の山伏組織化の方針に沿ったものと考え、特に区別せず聖護院側と大きく捉えていくこととする。

この史料は、文明十六年（一四八四）、これまで上田野（福島県東白河郡塙町植田）の檀那は奥州八槻別当が掌握してきたところ、近年八槻別当に従わないものがあるということから、成敗をするよう聖護院側から八槻別当に対して出されたものである。八槻別当とは、奥州八槻近津神社の別当で、明徳年間（一二三〇—九四）に駒石侍従阿闍梨良源から二所・熊野の先達職を得て修驗化していったという。<sup>(24)</sup>

ここでは「被」申候」とあるので、八槻別当が聖護院側に対し沙汰を求めた結果出されたものと考えられる。また、延

徳元年（一四八九）、八槻別当の荷物が檀那の被官に奪取されるという事件がおきた。<sup>(25)</sup> 別当が聖護院側に対して「嘆申」したことにより、聖護院側は糾明し荷物を全て返付させるよう諸先達にも通達せよ、と命じている。このように、先達の訴えに対して聖護院側が沙汰を出すという姿が確認できる。

さて、文明十八年（一四八六）、奥州依上保内で大嶋別当の同行山伏が殺害されるという事件が起きた。大嶋別当とは八槻別当の弟子にあたる者である。<sup>(26)</sup> この事件について聖護院側から「任<sub>レ</sub>当道大法」、堅可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>致<sub>二</sub>糺明<sub>一</sub><sup>(27)</sup>と、ことの真相を究明するよう下知があった。在地からの報告を受けて出されたものかどうかは不明であるが、【史料一】や延徳元年の要請に応じた例のように「被<sub>レ</sub>申」「嘆申」といった表現がないことから、噂を聞きつけた聖護院側が能動的に下知したものと考えられるのではなからうか。つづいて、このように聖護院が能動的に関与する例を詳しくみていきたい。

## 【史料二】

今度赤坂方、熊野参詣先達職事、被<sub>レ</sub>仰<sub>二</sub>付良賢<sub>一</sub>処、竹貫別当背<sub>二</sub>御成敗<sub>一</sub>、於<sub>二</sub>三山<sub>一</sub>相<sub>二</sub>語衆徒<sub>一</sub>、令<sub>二</sub>違乱<sub>一</sub>之条、言語道断奇恠之次第也。所詮、於<sub>二</sub>竹貫別当明賢<sub>一</sub>者、被<sub>レ</sub>破<sub>二</sub>却当道<sub>一</sub>訖。然間彼知行檀那等、為<sub>二</sub>御公物<sub>一</sub>、被<sub>レ</sub>仰<sub>二</sub>付行者講衆中<sub>一</sub>者也。今度於<sub>二</sub>脱物上分<sub>一</sub>者、随<sub>二</sub>見合<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>押<sub>二</sub>取之<sub>一</sub>由、乗々院法印御房被<sub>二</sub>仰出<sub>一</sub>処也。仍執達如<sub>レ</sub>件。

文明十六

十月二日

慶乗（花押）

快繼（花押）

八槻別当御房<sup>(28)</sup>

八槻別当は、奥州白河莊を拠点とした白河家を檀那とする先達であり、一方の竹貫別当は、石川莊の青龍寺別当八大院で、石川別当ともいい、石川莊を拠点とした石川家を檀那とする先達である。石川別当は石川一族であり、南北朝期以前から一族の先達職を所有していたという<sup>(29)</sup>。この一ヶ月前、石川一族のうち赤坂・大寺・小高三氏が奥州白河一家に改氏したことで、三氏は白河一家の先達である八槻別当の檀那となることが聖護院側によって安堵されている<sup>(30)</sup>。この史料は、それに対して、竹貫別当が熊野三山衆徒に訴えることで解決を図ろうとした結果、聖護院側から八槻別当に出されたものである<sup>(31)</sup>。その内容とは以下のである。

聖護院側は赤坂方の熊野参詣先達職を八槻別当良賢に与えたが、竹貫別当はそれに背いて赤坂方の先達職を取り戻そうと、熊野三山衆徒に訴え出た。そこで竹貫別当明賢は当道破却の処分となった。竹貫別当が知行していた檀那などは御公物として行者講衆中に任されることになり、「脱物上分」についての押収が八槻別当に命じられている。

ここで、竹貫別当は「破却当道」という処分を受けている。その意味するところは、知行してきた檀那を手放す事、つまり先達職の没収であった。なお、長谷川氏も指摘するところだが、文安・寛正年間に聖護院側から先達職の安堵をされている八槻別当に対して、竹貫別当は聖護院側と何の接点もみられないため、聖護院側に編成されていたとは考えにくい。また、【史料二】からわかるように、竹貫別当は聖護院ではなく、熊野三山に協力を求めている点からも、これ以前に聖護院下にあったとは思えない。よってここでは聖護院が支配下にはない竹貫別当の先達職を没収し得た点、また八槻別当に上分の徴収を命じるという強硬な態度をとっている点に注目したい。

さて、次の史料からは、文明十六年の裁許の後、聖護院の側から積極的に相論当事者の動向を探る姿が確認できる。

### 【史料三】

就「今度熊野参詣」、且那一向無「引導」由、被「申入」、不「及」上洛御礼、「参詣之処」、数輩且那引導之条、於「本山」

無<sub>レ</sub>其隱<sub>一</sub>。殊石河少輔殿已下事者、為<sub>二</sub>御公物之御旦那<sub>一</sub>處、上分等不<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>其沙汰<sub>一</sub>。事实者、言語道斷次第候。所詮、上分悉可<sub>レ</sub>致<sub>二</sub>取沙汰<sub>一</sub>之由、八槻別当被<sub>二</sub>仰付<sub>一</sub>候。嚴重候。可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>其沙汰<sub>一</sub>之由、被<sub>二</sub>仰出<sub>一</sub>候處也。恐々謹言。

延徳元

十月八日

慶俊（花押）

慶乗（花押）

石川

竹貫別当御房<sup>(33)</sup>

文明十六年の当道破却という処分によって竹貫別当の檀那は没収され、熊野先達をすることが出来ない状況になっていた。竹貫別当は、熊野への檀那引導を一切行わないと申し入れ、聖護院への上洛の御礼も行わずにいたが、なおも檀那引導を行っていることが明らかとなったことが右の史料から知れる。

文中に「事实者」とあるので、これは出された訴えに応じたものと考えるのが一般的である。「事实者」という表現は、竹貫別当が檀那引導をいまだに行っていることと、上分沙汰をしていないということを指しているものだろう。

しかしながら、後掲【史料五】で述べるように、上分沙汰があったかどうかは聖護院の把握するところで、上分沙汰がされていない場合は、聖護院の側から催促を行っている点を考えると、「不<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>其沙汰<sub>一</sub>」を受けての「事实者」という表現は、上分沙汰を行っていないという訴えに対して、「それが確かならば」というものではなく、聖護院側が把握した情報を竹貫別当につきつける際に、それが言語道斷であることを強調する程度のものであろう。また、「於<sub>二</sub>本山<sub>一</sub>無<sub>二</sub>其隱<sub>一</sub>」とあり、本山、すなわち熊野において竹貫別当が参詣していることは明らかなことであったといえる。つまり、熊野への参詣があったかどうかは聖護院側が把握できるところであったと考えられる。よって、檀那引導の件についても聖護院側は承知しているものと考えることができる。

以上のことから、両者のうちの一方から訴えがあつてそれに応じたものというよりは、聖護院側が自らその後の状況

をみて能動的に行動し、命令したものと考える。よって、文明十六年に先達職を解任した竹貫別当の動向について注意を払うなど、聖護院は積極的に行動を起していると考えられるのではないか。では、聖護院側の処分は、その後の程度の影響を与えたのかみていきたい。

#### 【史料四】

態令<sup>三</sup>啓上<sup>一</sup>候。抑白川之先達八槻別当企<sup>三</sup>無理之相論<sup>一</sup>。当庄之先達於<sup>三</sup>京都<sup>一</sup>被<sup>レ</sup>失<sup>三</sup>生涯<sup>一</sup>候。甚以遺恨之次第也。無<sup>三</sup>先達<sup>一</sup>者、一門家風拜

三御山事、不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>有<sup>レ</sup>之。是偏歎存候。三山之衆徒様以<sup>三</sup>御談合<sup>一</sup>、速 聖護院様<sup>江</sup>被<sup>レ</sup>達<sup>三</sup>上聞<sup>一</sup>、民部僧都遺跡、被<sup>レ</sup>成<sup>三</sup>下御判<sup>一</sup>候者、可<sup>レ</sup>畏入<sup>一</sup>候。此旨無<sup>三</sup>御信用<sup>一</sup>者、

三所権現<sup>於</sup>当庄<sup>江</sup>可<sup>レ</sup>奉<sup>三</sup>勸請<sup>一</sup>者也。懸意之趣、為<sup>三</sup>申届<sup>一</sup>、一家同心之状如<sup>レ</sup>件。恐々謹言。

八月四日

前駿河権守成光<sup>在判</sup>

白鬢光忠<sup>在判</sup>

坂路隆光<sup>在判</sup>

宮内親光<sup>在判</sup>

赤坂政光<sup>在判</sup>

蒜生政広<sup>在判</sup>

(ここに石川一族の傘連判あり)

謹上 三山宿坊御中

〔<sup>(表書)</sup>明応六年三月廿一日

慶俊 (花押)

慶乗 (花押)<sup>34</sup>〕

これは、石川一族から熊野三山の宿坊に聖護院への仲介を依頼したものであり、裏書から、恐らく明応五年をさほど遡らないものと考えられる。

さて、ここで話題に上っている「当庄之先達」「民部僧都」とは何者なのだろうか。当庄の先達が京都において生涯を失った、つまり先達職を失ったことで石川一族の先達がいなくなり、先達がいなければ一門は三御山を拝むことができないと嘆いている点、また、石川一族が民部僧都の跡職の補任を申し入れている点から、当庄の先達とは民部僧都と考えていいだろう。そして、文明十六年・延徳元年に石川一族の先達職を没収されていたのは竹貫別当であったことを考えると、ここで先達職を失った当庄の先達<sup>(35)</sup>は民部僧都とは竹貫別当と考える。

竹貫別当は後掲【史料五】でみるように、明応三年（一四九四）段階では石川の先達職を没収されている状況にあり、また、八槻別当が代官として竹貫別当の代わりに上分沙汰をすることは、「先御代」に仰せ付けられたとあることから、明応三年以前から竹貫別当は先達職を保持していなかったといえる。また、明応四年八月段階でも竹貫別当了印は前代未聞の緩怠により、檀那を没収され公物の状態であった<sup>(36)</sup>。この後、竹貫別当が先達職を取り戻すのを確認できるのは、明応八年である<sup>(37)</sup>。このように、【史料四】の前後で、竹貫別当は先達職を保持していない状況にあったことを考えると、ここに見える先達職を失った民部僧都の一件は、以前の文明十六年のことを持ち出したものであろう。

以上のように、竹貫別当が解任されて以後、聖護院によって正式に補任された先達がいらない状態が続き、石川一家は熊野参詣が出来ないため、聖護院に民部僧都の跡職補任を訴えねばならない状況にあったと考える。ここから、竹貫別当の先達職解任という聖護院側の処分は確実に浸透していたのではないかと考える。このように、聖護院はその配下の先達のもとより、配下ではない先達に対しても緊密な支配を行っていた。その背景には応永年間以降、熊野先達の直接支配に乗り出し、各地で先達職を与え、また先達職を安堵するなどの活動を積み重ねることで、熊野先達の直接支配者という存在

になつていたことがあるだらう。<sup>(38)</sup>

次に、明応三年に聖護院側から出された八槻別当に対する上分納入命令を確認したい。

#### 【史料五】

就<sup>レ</sup>当国石川、竹貫別当不儀、引導之旦那等、被<sup>レ</sup>召上、為<sup>レ</sup>御代官、可<sup>レ</sup>有<sup>レ</sup>取沙汰之由、先御代被<sup>レ</sup>仰付候き。其後不<sup>レ</sup>及<sup>レ</sup>御沙汰之様存候。如何候哉。不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>然候。於<sup>レ</sup>国急度被<sup>レ</sup>相届、来年有様被<sup>レ</sup>申入候者、可<sup>レ</sup>然候。恐々謹言。

明応三

八月十九日

八槻別当御房<sup>(39)</sup>

小奉行

慶俊（花押）

文明十六年に竹貫別当の先達職が解任されて以降、竹貫別当が所持していた檀那については、八槻別当が代官として聖護院への上分沙汰などを請け負っていた。ところが、この史料によれば八槻別当はその義務を果たしていなかったという。また「来年有様被<sup>レ</sup>申入」とあり、実際には在地の状況報告などを行っていないことがわかる。ここで注目したいのは、上納や報告の怠慢に対し、聖護院側から催促をするなど積極的な関与がみられる点である。また、さらにこの翌年にも再び聖護院側から八槻別当へ上分の徴収を命じる奉書が確認できる。そこには「若不法懈怠之儀在<sup>レ</sup>之者、雖<sup>レ</sup>為<sup>レ</sup>何時、可<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>召<sup>(職)</sup>放彼職<sup>(40)</sup>」とあるように、八槻別当に対して強い姿勢でもって支配を行っていたことが確認できるだらう。以上、聖護院による熊野先達支配の特徴についてまとめると、(1)熊野先達からの要望によって沙汰を出していた。(2)下知に背けば先達職を剥奪するなど、緊密な支配を行っていた。(3)その下知の影響力は大きく、在地に浸透するものだった。

た。(4) 先達が上分納入・報告を怠れば催促の命令を行い、また裁許の後も当事者の動向を探っているなど、先達の要請に応じるだけではなく能動的に関与する姿勢が窺われる。

## 第二節 寺内山伏集団に対する支配

次に、寺内山伏集団と聖護院との関係について考えてみたい。寺内山伏集団について知ることのできる史料は少ない。特に聖護院からの命令を内容とする寺内山伏集団に対する文書は、熊野先達を宛名とするそれと比べるとはるかに少なく、その上、聖護院と寺内山伏集団とのつながりは断片的にしか分らないため、その関係が把握しづらい。そうした中で、地域での活動がある程度知られ、かつ聖護院とのつながりも指摘できるものが観音寺山伏である。

観音寺山伏と聖護院の関係をめぐっては、応永年間(一三九四—一四二八)以降、本山派に編成されたという長谷川氏の指摘がある一方で、増山智宏氏は編成という事実は見当たらないという指摘をしている。<sup>(4)</sup>このように異なる指摘があるのは、冒頭で述べたように、これまで熊野先達と寺内山伏集団の区別がされていなかったことから、強力な権力を行使していたという聖護院の姿が一般的となり、これに対して、寺内山伏集団に対する支配がどのようなものであったかについては、あまり明らかにされていないことが大きく影響しているように思う。

そもそも、寺内山伏集団の実態が分かる史料が少ない状況の中で、聖護院下にあることを明記するものはほとんどなく、寺内山伏集団が聖護院下にあると判断する基準が明らかではない。そのようなことから、聖護院下にあるか否かの議論が起こるのである。そこで、熊野先達とは区別した上で、寺内山伏衆集団に対する支配という観点で改めて『観音寺文書』を検討したい。

# ① 聖護院の権力

伊吹山は近江・美濃国にまたがってそびえ立つ霊峰であり、『帝王編年記』養老七年（七二三）条には、擬人化された伊吹山の神がみえる。やがて伊吹神という神格化されたものになり、神階奉授の対象となっていくのが『日本三代実録』で確認できる。こうした神階奉授と時を同じくして、伊吹山中には山岳寺院が展開した。伊吹山寺は天台山寺・比叡山寺・己高山寺などと並ぶ山岳寺院であった。『三代実録』元慶二年（八七八）二月十三日条によると、伊吹山護国寺が勅許により定額寺に指定されている。伊吹山護国寺が当初どこに所在したかは不明であるが、のちに観音寺・弥高寺・長尾寺・太平寺の四護国寺へと発展していったと考えられる。伊吹山四護国寺の一つである観音寺は、伊吹山中の弥高山という尾根上に弥高護国寺と共に存在していたが、その後鎌倉中期の正元年間（一二五九―一六〇）に、坂田郡大原莊（現坂田郡山東町朝日）の地へ莊園鎮守として勧請された。<sup>(42)</sup>しかし、移転の後も弥高寺・長尾寺と並んで祈禱命令が出され、<sup>(43)</sup>また伊吹社と三宮社の祭事等を四ヶ寺で行うなどしているため、<sup>(44)</sup>伊吹山四護国寺としての性格は維持されていたと思われる。四ヶ寺が共同でその行事を務める伊吹社と三宮社は伊吹山中に存在し、伊吹社（伊夫伎社）は『延喜式神明帳』にも載る式内社である。現在、伊吹に伊夫岐神社、上野に三之宮神社がある。<sup>(45)</sup>それぞれ、伊福貴大菩薩・三宮女一権現を祭っており、四ヶ寺の和与状<sup>(46)</sup>などでは両祭神に誓う姿が確認され、伊吹山の信仰の中心的存在であったことが窺える。

さて、聖護院と観音寺山伏の接触は、伊吹山「一宿」をめぐる相論の中にもみることができ。応永年間、四ヶ寺山伏の中で、伊吹山一宿を三宮とするか弥高寺とするかをめぐって対立が起き相論となった。本節では、聖護院の裁決が在地へ与えた影響とはどのようなものであったのかという点を中心にみていきたい。相論中、聖護院による裁許が応永七年と十三年の二通、『観音寺文書』にみえる。

## 【史料六】

ヒテノ文

伊吹山大乗峯斗數事、任「行者之旧跡」、以「三宮」可<sup>レ</sup>為「一宿」之旨、依「三山檢校御下知」、所「定置」如<sup>レ</sup>件。

応永七年<sup>庚辰</sup>十月七日

高札文

当山大乗峯就「宿相論事」、弥高寺・長尾寺山伏等、令<sup>レ</sup>違「背檢校御下知」間、於「彼両寺山伏等」者、可<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>解「却当道之職」之旨、依<sup>レ</sup>仰所「定置」如<sup>レ</sup>件。<sup>(47)</sup>

応永七年<sup>庚辰</sup>十月七日

「ヒテノ文」は碑伝文のことと考えられる。高札・碑伝文共に一紙に記されている。三山檢校・檢校は当時熊野三山檢校職にあつた聖護院道意と考えていいだろう。よつて、これらは聖護院の意向を受けて出されたものと考えられる。碑伝文とは峯入りの際に用いられた標識で、通常行者の姓名・峯入年月日・峯入度数を記入し峰中の宿に立てられたといふ。<sup>(48)</sup>一宿の位置に関する命令であるため、最も効果が得られる、宿に立てるといふ碑伝文の形態をとつたのだろう。

その内容は、聖護院の下知に背いたことによる、弥高寺・長尾寺山伏の「解「却当道之職」」処分と、三宮を一宿とする下知である。一宿とは、伊吹山峰入りの行路上にある最初の霊場であり、かつ入峯・参拝者が数多く訪れ、山伏はそこで峯入りの先達役となるなど、接待所的な役割を果たしていたといふ。<sup>(49)</sup>また十六世紀の葛城山では、一宿である伽陀寺が入峯役錢を徴収していた。<sup>(50)</sup>伽陀寺では先達だけではなく、それに同行する者からも徴収しており、相当の経済収入があつたと思われる。恐らくは伊吹山の一宿についても、葛城山一宿と同様に相当の経済収入があつたのではないか。

さて、「解「却当道之職」」とは何だろうか。これをめぐつては「熊野先達職」の解任とする長谷川氏と、「伊吹山大乗

峰からの追放」とする増山氏<sup>(53)</sup>で意見が分かれている。筆者は、増山氏の指摘が妥当であると考ええる。この相論は伊吹山に關するものであり、観音寺・太平寺にとっては元のように三宮を一宿に戻すことが解決を意味するだろう。弥高寺・長尾寺に熊野先達が存在していたことを示す史料は見当たらず、仮に存在していたとしても寺内山伏全員が熊野先達をしていたとはいえないことを考えると、弥高寺山伏全体を対象に熊野先達職剥奪を命じるということは、弥高寺山伏のうち熊野先達を勤める一部の者に影響を与えるのみだろう。また再三述べるように、山伏の活動は熊野先達に限られたことではなく、むしろ伊吹山における活動の方が日常的に関わることで重要性が高いと思われる。この処分は伊吹山の修験活動を円滑にするために出されたものと考えられるので、弥高寺に対する処分は伊吹山での活動を制限する内容である方が適切と考える。

話をもとに戻そう。【史料六】以前にどのような下知があったのだろうか。実は、これ以前に弥高寺を除く三ヶ寺は「欲早蒙<sup>(54)</sup>檢校御成敗<sup>(55)</sup>被<sup>(56)</sup>停<sup>(57)</sup>止弥高寺監訴<sup>(58)</sup>」、如<sup>(59)</sup>「先規<sup>(60)</sup>以<sup>(61)</sup>三宮<sup>(62)</sup>為<sup>(63)</sup>一宿<sup>(64)</sup>」、遂<sup>(65)</sup>中<sup>(66)</sup>大峯斗數<sup>(67)</sup>事<sup>(68)</sup>」<sup>(54)</sup>として聖護院に訴え出ている。よって、ここに見える下知とはこの訴えに対して出されたものだろう。「ヒテノ文」で聖護院は三宮を一宿とする立場をとっていることから、「下知」も同様の内容であり、三ヶ寺の要望に沿った裁許を行ったと考えられる。

このように、元の如く三宮を一宿とすることで落ち着いたかにみえた相論であるが、その後応永十一年に弥高寺が聖護院へ訴え出たのを受けて、応永十三年、今度は弥高寺を一宿とする旨の裁許を行っている<sup>(55)</sup>。これら二度の裁決で、聖護院はあつさりとして支持する側を変えていることから、聖護院には定まった見解がなく、相論に執着している様子が全く感じられない。「解<sup>(69)</sup>却当道之職<sup>(70)</sup>」という処分も在地からの要請を受けてのものであったと考える。よって「解<sup>(71)</sup>却当道之職<sup>(72)</sup>」という厳しい処分に出てはいるものの、聖護院による積極的な介入の結果というわけではないのではないかと。

つづいて、応永十三年の聖護院の裁定以後、この相論の行方をみていきたい。

【史料七】

(端裏書)

「弥高寺起請文案」

弥高護国寺衆徒等謹言上

欲<sub>下</sub>早預<sub>二</sub>無偏御成敗<sub>一</sub>施<sub>中</sub>当寺面目<sub>上</sub>事

右当寺者、天智天皇御願、七高第三<sub>二</sub>之靈場伊福貴山之本寺也。峯入山臥之法者、遂<sub>二</sub>先途<sub>一</sub>、着<sub>二</sub>当山<sub>一</sub>、符置<sub>二</sub>名字<sub>一</sub>之条、先規也。故実也。国中其隱<sub>無</sub>之處、今度太平・観音兩寺衆徒等、背<sub>二</sub>先規<sub>一</sub>、致<sub>二</sub>種々之狼籍<sub>（藉）</sub>、剩峯入山伏道具悉奪取之条、前代未聞惡行也。凡四ヶ寺和与之子細、徳治三年致<sub>二</sub>連署<sub>一</sub>、堅令<sub>二</sub>和睦<sub>一</sub>之處、太平・観音一ヶ寺乱旧規、企<sub>二</sub>惡行<sub>一</sub>之条、真慥不<sub>レ</sub>憚哉。次被<sub>レ</sub>成<sub>二</sub>下貫首令旨<sub>一</sub>之處、不<sub>二</sub>請取申<sub>一</sub>之由、被<sub>レ</sub>仰出<sub>二</sub>驚存者<sub>一</sub>也。如<sub>レ</sub>此御成敗者、或以<sub>二</sub>御力者<sub>一</sub>被<sub>レ</sub>触送、或以<sub>二</sub>領主<sub>一</sub>被<sub>レ</sub>仰之處、敵方衆徒等持向、致<sub>二</sub>噉々沙汰<sub>一</sub>之間、彼兩寺衆徒等以<sub>レ</sub>次構<sub>二</sub>謀作<sub>一</sub>、致<sub>二</sub>惡行<sub>一</sub>欵之間、不<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>是非之問答<sub>一</sub>之處、立帰、令旨違背之由、訴申之条不便之次第也。宣<sub>レ</sub>仰<sub>二</sub>御邊迹<sub>一</sub>哉。此条偽申候者、

大峯葛木金剛童子、殊者当寺鎮守伊吹兩社天満天神、別者当寺本尊観自在尊之御罰<sub>於</sub>衆徒等可<sub>レ</sub>蒙候、以<sub>二</sub>此旨<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>御披露<sub>一</sub>候、恐惶謹言。

九月廿八日

継尊 在判

舜栄 在判

進上御奉行所<sub>(56)</sub>

これは、熊野三山奉行である乗々院に弥高寺寺僧が観音・太平兩寺の処分を求めたものである。年末詳のものであるが、四ヶ寺のうち太平寺・観音寺と弥高寺・長尾寺との間で分裂が生じていること、また、山伏修行の妨害などがみえる点を

考えると、一宿相論に関する史料であろう。そして、観音・太平両寺が「貫首令旨」すなわち聖護院からの令旨の受取を拒否している点からは、弥高寺に有利な裁許が下された応永十三年以降のものと考えられる。応永十三年に一段落した相論であったが、在地では相変わらず一宿をめぐる争いが起きていたようである。観音・太平両寺は令旨を受け取らず、命令に背いて峯入山伏の道具などを奪取するという行動に出ており、両寺は聖護院の下知に背いている状況にあることが分かる。さて、この相論は最終的には伊吹社長者による書状が出されることで解決した。それが次の史料である。

### 【史料八】

大乘峯事、為三宮一之宿可有入峯之由、自弥高寺殊申候。然上者、四ヶ御和合候て、如先規社役等、御沙汰候者、目出可悦入候。猶々一宿事、三宮治定之上者、向後不可有相違候。目出候。如何様近日於社頭会合候者、自是も少々罷出候て、相共対面可申候。恐々謹言。

〔後半〕  
「永享拾年」

卯月廿六日

長者大西

性隆（花押）

長者村田

元澄（花押）

衆徒御中<sup>57</sup>

その後、数ヶ月で再び弥高寺が四ヶ寺の秩序を乱している。その際伊吹社氏人に対して出された、弥高寺を除く三ヶ寺衆徒の申状から、相論解決時の背景がわかる。

【史料九】

伊吹山 三ヶ寺一同衆儀日、

可<sub>レ</sub>為<sub>二</sub>早祝・氏人御成敗<sub>一</sub>、任<sub>二</sub>理非<sub>一</sub>被<sub>レ</sub>成<sub>二</sub>御遷宮<sub>一</sub>事

〔石カ〕一味和合婦僧息諍者、出家之大旨□門風俗也。然依一之宿相論、四ヶ儀絶及□年一条、背本意畢。雖然、社役等為三ヶ之□法<sub>沙カ</sub>執行畢。爰当年自弥高寺内々被□申願之間、自氏為堅御口入上、任德治之□与状<sub>和</sub>、毎事以一味之儀、可有沙汰之由、依被□於社頭之神前和睦畢。然上者、今度之御遷宮等、以四ヶ一味之儀談合之処、不幾不和儀□出来、言語道断次第也。(後略)<sup>(8)</sup>

四ヶ寺は伊吹社の社役などを共同で務めていたが、一宿相論が起きたことにより、四ヶ寺間の関係は永享年間に至るまで崩れた状態であり、社役は弥高寺を除く三ヶ寺が勤めていた。そこへ永享十年（一四三八）になって、弥高寺から内々に伊吹社の氏人に願ひ出があつたことで、氏人が仲介役となり四ヶ寺の和合へと至つたという。つまり、先の【史料八】は弥高寺が譲歩するという形で和解を内々に願ひ出てきたことによる、仲介者からの伝達にとどまるもので、命令ではないだろう。

さて、【史料七】で聖護院へ訴え出た弥高寺は、結局伊吹山での活動が困難となる状況に陥つてゐることが分かる。【史料七】以降、聖護院からの反応が分かるような文書は見当たらず、詳細は不明である。

だが、【史料七】で観音・太平寺が聖護院の命令を拒否している点、【史料八】では聖護院の存在が感じられない点、弥高寺を一宿とする旨の裁許の後、弥高寺が孤立している点を考えると、聖護院は【史料七】の後、積極的な関与をしなかつた、或いは観音寺・太平寺に対する一応の処分をしたものの、その影響はなかつたと推測される。また、最終的には弥高寺が譲歩し三ヶ寺に歩調を合わせたからこそ、解決がなされた点からは、伊吹社長者を仲介としての四ヶ寺間の和解とい

う、上部権力に頼らない形で解決であったといえるだろう。よって、最終的には聖護院という上部権力が必要とされず、聖護院の裁許が絶対的な規範として、在地で受け入れられない状況になっていったといえるのではないか。また、聖護院の権威を頼らずに解決することについて、聖護院からの反応が何もない点から、聖護院側には積極的に相論に介入しようという意志もなかったのではないかと推察する。

以上、相論中の聖護院の反応から、聖護院の側には相論に積極的に関与する意志はなく、消極的な姿勢をとっていたと考える。また熊野先達については、配下にはない山伏に対しても権限のある聖護院であったが、寺内山伏集団に対しては、配下の山伏でありながらもその裁許が拒否されるなど、絶対的な権力者ではなかったと考える。

さて、聖護院と関係を持っていた観音寺であるが、長谷川氏は山伏と聖護院の関係は一宿相論における一時的なものではなかったと対して、増山氏は聖護院の裁定が一貫しておらず、訴えた側の内容を追認したにすぎない点、相論解決が聖護院の裁定とは全く別の次元で図られているという点から、観音寺山伏の本山派編成を否定している。<sup>(59)</sup>

しかしながら、前述のように聖護院の裁定が一貫しないものであった点は、本山派が在地へ干渉する意志がなかったことを示し、また各地域が抱える問題に対しては聖護院の側としても追及し得なかったことを示しているのではないかと考える。

さて、次の史料は長谷川氏も用いたもので、聖護院と観音寺との関係が続いていたことが窺われる。

#### 【史料十】

(端裏書)「山門江自寺僧請文安文」  
無「專書」

就「今度了円山伏盗人実犯之事」、為「山上上使」公人差被「下申」候子細者、彼仁可「被」処「誅罰」処仁、以「先当寺之老僧」重々依「口入申」、於「了円」者、領申処也。就「中大乗之事」ハ、盗人令「許容」上者、聖護院御門跡様并大原判官殿様

江、為<sup>二</sup>山上<sup>一</sup>此謂有<sup>レ</sup>御屈<sup>一</sup>、重而可<sup>レ</sup>有<sup>二</sup>御成敗<sup>一</sup>者也。仍為<sup>二</sup>後日<sup>一</sup>請文之狀如<sup>レ</sup>件。

寛正六年五月廿一日

観音寺衆徒中

院主

融慶（花押）

役所  
永春 在判

山門西塔院上使御中<sup>(61)</sup>

寛正六年（一四六五）に観音寺衆徒が山門へ提出した請文で、そのあらましは以下のようなものである。

盗人山伏了円のことについて、山上上使を下された。了円は処罰されるところであったが、当寺の老僧が口入したこと、了円の身柄は衆徒方で預かることとなった。大乘では盗人が許容されることになっているため、聖護院と大原へ山門として事情を届けた上で、了円を成敗するよう衆徒は山門に求めている。

山伏に関することで観音寺衆徒が聖護院に伺いを立てようとしている点、一宿相論の際、聖護院と観音寺のつながりは山伏を中心としたものであった点を考えると、長谷川氏の指摘するように、寛正六年に至っても聖護院と観音寺の山伏の間には何らかの支配関係は続いていたといえる。

さて、ここに聖護院と並んで大原氏がみえるのは何故だろうか。大原氏と山伏の関係について長谷川氏は「一五世紀中葉には、山伏の処遇に関して同氏が介入するようになっていったと思われる」、「『山伏依<sup>レ</sup>有<sup>二</sup>訴訟<sup>一</sup>』とあるので、山伏に対する関与も何らかの動揺を利用して推進された<sup>(62)</sup>」とし、山伏の支配者として大原氏の存在を指摘している。その史料が次のものである。

【史料十二】

定 観音寺一山会合之事

一、両社祭礼大師講、其外一山会合之時モ、山伏三和尚マテ者、自衆徒酌ヲ可被取、其末ハ山伏酌ヲ可取也。

但於山伏之坊者、一円山伏酌ヲ可取也。  
雖然、少人御座之時ハ、從衆徒、如定酌ヲ可取也。

一、山伏衣ハ、中間衣ヲ五人マテハ可着也。

一、山伏本堂座敷者、正面之西、二本目之柱ヨリ可居也。

一、本堂之山伏、畳ハ可被四帖敷。但此内二帖ハ山伏依有訴訟、我等口入申、被免之者也。

一、山伏枕ハ、三和尚マテハ、可為朱枕。其次ヨリハ可為裏赤枕也。

右、此外者、任先規、可被勤。万一致新儀、及異儀輩出来時ハ有注進、可致成敗。為寺中不可有楚忽子細者也。仍為後証定置状如件。

宝徳四年三月二日

対馬守

信長（花押）

越前守

信業（花押）

観音寺衆徒御中<sup>(63)</sup>

これらは、いずれも、一山会合の際の山伏の行動・衣服などに関する規定である。四つ目の一つ書きに注目したい。山伏から訴訟があり、大原氏が「口入」することで山伏が本堂に敷くことのできる畳の枚数が増えたという。「口入」とは衆徒に対して大原氏が交渉したことを考える。よって、この規制をめぐって対立しているのは、大原氏と山伏というより

は、山伏と衆徒ということになる。つまり、これは大原氏による一方的な山伏規制ではなく、山伏と衆徒との対立から生じた山伏の身分規制について、観音寺側から要請を受けたために出されたものではないだろうか。では、衆徒と山伏どちらから要請を受けたのだろうか。

衆徒に対して交渉する必要があるということは、衆徒の側が既に山伏の身分規制に関する何らかの見解をもち、その内容を大原氏も把握していることを示していると考ええる。つまり、山伏身分規制に関する衆徒側の見解が、大原氏に伝えられており、そこへ山伏からの訴訟があることで、大原氏は山伏と衆徒の仲介役となったということだろう。そして五つの条目のうち、山伏の訴訟によって規制緩和されたものは一つにとどまることから、山伏の訴えを受けて出されたものではないと思われる。また山伏身分規制を、山伏ではなく衆徒に対して出していることを合わせて考えると、山伏が大原へ訴え出たものというよりは衆徒が大原氏に訴え出たことによって出された規定であると推察する。すなわち、山伏と大原氏の関係については日頃からの支配関係があつたわけではなく、大原氏と衆徒との関係の中で生じたものに過ぎないと考ええる。衆徒からの訴えを安堵することが、山伏に対して権限を及ぼすことになったものだろう。

そこで【史料十】に戻ってみよう。大原氏がここに現われたのは、日常的に衆徒と大原氏とがつながりをもっていたからであり、観音寺衆徒がその関係を考慮したことによるものと考ええる。日常的に観音寺と支配関係にあった大原氏と並んで聖護院が登場している点を見ると、聖護院についても報告を必要とする程の関係にあったといえよう。このことから、聖護院と観音寺の間には何らかの支配関係が存在していたと言えるだろう。つまり、了円という山伏に関する報告であったこと、応永年間の一宿相論では主に山伏が聖護院との関係を築いていたことを考えると、ここに聖護院がみえるのは、依然として聖護院と山伏の間にはつながりがあつたといえるだろう。よって、観音寺山伏は、応永年間の一宿相論を契機に聖護院下に入ったものと考ええる。

増山氏の指摘するように、聖護院の裁定が一貫しておらず、訴えた側の内容を追認したにすぎない点、相論解決が聖護

院の裁定とは全く別の次元で図られているという点は確かにその通りであり、長谷川氏の指摘のように山伏に対して強力な指導権を確保したとはいえない。

しかしながら、聖護院と山伏の支配関係が続いていたことを踏まえると、訴えた側の内容を追認するに過ぎないという聖護院の消極的・受動的姿勢こそが、寺内山伏集団に対する支配のあり方であったと考えられるのではないだろうか。つまり、寺内山伏集団が聖護院下に入ることとは、常にその下知を受ける関係となることを示すのではなく、聖護院としても在地からの要請のない限り介入することはなかったと考える。では、次に聖護院下に入ることの在地山伏集団への影響について考えてみたい。

## ② 在地山伏集団の変化

ここでは、聖護院下に入る前後の在地組織の変化から寺内山伏に対する聖護院の支配について考えていきたい。この点について長谷川氏は以下のように指摘している。

聖護院による組織化以前は、在地において形成された先達を含む山伏結合は自律的に紛争を処理する機能を持っていた。しかし応永年間、山伏結合内部で対立が生じた際に、山伏に関与する合理的根拠を持ち、かつ俗権力に対抗し得る政治力・権威をもつ存在として、聖護院に裁定を求め聖護院下へ入る。結果、在地山伏が保持していた問題処理機能は放棄され聖護院に掌握された。<sup>(64)</sup>

しかしながら、長谷川氏がその根拠とする史料をめぐっては、その後増山氏が新たな解釈を提示したことで、在地山伏組織への影響に関する見解についても再検討の必要が生じたと考える。では問題となる史料をみていきたい。

応安二年（一三六九）、観音寺山伏と行信律師との間で何らかの相論が起きている。

## 【史料十二】

近江国伊吹山住山臥等請<sub>三</sub>諸寺御判談<sub>二</sub>事

(中略、二十二ヶ寺とその代表者と思われる人物の署判あり。)<sup>(65)</sup>

右旨趣者、伊吹山觀音護国寺山臥<sub>与</sub>行信律師理非相論之間、就<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>成<sub>二</sub>御書下<sub>一</sub>、去二月廿二日、一国山臥蜂起之間、兩方対決之處、理非懸隔非<sub>三</sub>同日論<sub>一</sub>、彼行信律師依<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>理、不<sub>レ</sub>能<sub>三</sub>一口問答<sub>一</sub>之間、罪科難<sub>レ</sub>遁、而間山臥衆中崛伏之余、以<sub>三</sub>彼行信律師<sub>一</sub>放<sub>三</sub>当道之衆中<sub>一</sub>畢。仍已非<sub>三</sub>当道之衆中<sub>一</sub>、何及<sub>三</sub>是非沙汰<sub>一</sub>乎。而彼行信律師無道之至極、不<sub>レ</sub>決<sub>三</sub>理非<sub>一</sub>推<sub>三</sub>寄当寺<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>滅<sub>三</sub>亡一寺<sub>一</sub>結構、已露顯畢。然者國中諸寺、且任<sub>三</sub>道理明鏡之旨趣<sub>一</sub>、且任<sub>三</sub>寺門破却之造意<sub>一</sub>、旁難<sub>レ</sub>遁<sub>三</sub>其科<sub>一</sub>者乎。若尔者面々寺号之下被<sub>レ</sub>加<sub>三</sub>奉者<sub>一</sub>、欲<sub>レ</sub>備<sub>三</sub>後日之龜鏡<sub>一</sub>之状、如<sub>レ</sub>件。

応安二年卯月廿一日

山臥衆中等<sup>(66)</sup>

内容は以下の通りである。観音寺と行信の間で起きた相論について、「御書下」<sup>(67)</sup>がなされ、一国山伏が蜂起したことにより、両方の対決となったが、行信には道理がなく問答をする事が出来なかつたので、その罪は明白となり、山伏衆中は行信を当道の衆中から追放した。しかし、行信は無道極まりなく、観音寺に押し寄せ滅亡させようと計画している事が明らかとなった。そこで、山伏衆中は國中諸寺に対して行信に非があることについての承認の判を押してもらうよう依頼したのである。

差出人としてみえる山伏衆中とはどのような集団だろうか。「近江国伊吹山住山臥等請<sub>三</sub>諸寺御判談<sub>二</sub>事」とあり、伊吹山住山伏であることがわかる。また、山伏衆中が署判を求めた諸寺院中に(大原)観音寺がないこと<sup>(68)</sup>から、差出人は観音寺の山伏衆中と考えてよいだろう。次に一国山伏とは、「國中諸寺」と同一のものを指すと思われ、省略部分に署判を加える寺院に所属する山伏だろう。<sup>(69)</sup>

ところで、ここでも長谷川氏は「当道」を熊野先達組織と解釈し、行信は先達としての職分を剥奪されたとしている。<sup>(70)</sup> それに対して増山氏は「熊野の行者講ではなく、伊吹山（の大乗峰）に関わる山伏達で構成された衆中」<sup>(71)</sup>としている。この点については増山氏の指摘の通りではないかと考える。ここに署判する一国山伏中のうちにも確実に熊野先達がいたといえる寺院は八ヶ寺に過ぎないこと、また観音寺には熊野先達がいたには違いないが、「はじめに」でも述べたように、必ずしも寺内山伏の全構成員が先達職であったとは考えられないことから、山伏衆中・一国山伏は熊野先達がその構成員という特徴を押し出した組織ではなかったといえる。よってこの史料は、観音寺山伏衆中からの追放、つまり広い意味では伊吹山での山伏活動を禁止したものであると考える。では、一国山伏が登場する意義とは何なのだろうか。

「御書下」があつたことで、「両方対決」すなわち、一国山伏らによる法廷が開かれた。そして、観音寺山伏衆中是一国山伏による裁許をもとに行信を衆中から追い出し、最終的には証人として一国山伏の署判をもらうことで今後の証拠としている。ここからは、確かに長谷川氏が指摘するように、自律的に解決を図る在地山伏の連携が存在していたといえるだろう。しかし、聖護院下となつて以後、在地にあつた問題処理機能が聖護院へ移行したという点については疑問を感じる。確かに、応永年間の相論では先にみた一国山伏という結合は確認できなくなっている。それは長尾寺山伏が途中で弥高寺側へつくなど、四ヶ寺の間でも短期間の間でも対立メンバーの変化がおきており、伊吹山を修験場とする「一国山伏」の中にも長尾寺のように立場を変える寺院があつたと考えられ、長谷川氏・増山氏も指摘しているように総員一致の態勢をとるのが困難だったためだろう。

詳細は次章でみるが、一宿相論の際、不利な立場に追い込まれた弥高寺は、伊崎寺五ヶ寺という、これもまた複数の寺院に所属する山伏らの結合体と思われる集団のバックアップにより、聖護院から弥高寺に有利な裁許を得ている。その際伊崎寺五ヶ寺は、「国中」、つまり、先ほどみた一国山伏も弥高寺を一宿とすることに同意している旨、証言しているのである。伊崎寺五ヶ寺が証言するように一国山伏が同意の意志をもっていたことについては、前述の通り、一国山伏の構成

員が足並みを揃えた意見を持っていたとは考えにくいので、伊崎寺五ヶ寺の根柢のない主張であったのだろう。

しかし、ここで注目したいのは、聖護院が相論に介入した後においても「国中」という概念が存在し、また、「国中」の同意を得ることが相論を有利に運ぶ手段と考えられていることである。つまり、一宿相論では応安二年の時のように一國山伏が裁判官となる姿は確認できないが、それは足並みが揃わなかったためであろうから、観音寺が聖護院下となったとしても、山伏間で共通の見解が得られるのであれば、地域で起きた山伏間の問題処理機能は在地にあり続けたのではないかと考える。

さて、一宿相論では、日常的に共に活動し自律的に問題を解決しようとする伊吹山四ヶ寺集団の存在も確認できる。前述の通り、伊吹山四ヶ寺は、伊吹社の年中行事を共に運営するなどの姿が確認でき、日頃から協力体制をとっていた。<sup>(74)</sup>同様のことが四ヶ寺に所属する山伏についてもいえる。「自昔至今四ヶ寺山伏等、以三宮<sup>(75)</sup>為一宿、入峯斗薮<sup>(75)</sup>」していたとあり、協力姿勢がみえること、また弥高寺が一宿に関して異論を唱えた際、弥高寺以外の三ヶ寺の山伏は群議を開き、弥高寺の説得を試みるなどの姿が確認でき、通常伊吹山修験を介して四ヶ寺山伏はつながっていたと考えてよいだろう。

前節でみたように、一宿相論は、最終的には弥高寺が内々に伊吹社氏人に対して和解を願い出、長者仲介のもと四ヶ寺が神前で誓約することで解決された。仲介があったというものの、四ヶ寺間で解決をしていたのである。結局、弥高寺が譲歩して解決するという当事者間の和解の道をたどったところからすると、聖護院下にあっても、必ずしも聖護院の裁許を必要とせず、自力解決の道が残されていたことが分かる。

地域での活動がある限り、山伏はその地域での活動を最重要視するはずである。したがって、自ずと地域の山伏結合は必要とされてくるに違いない。よって、山伏結合を形成する寺内山伏集団が聖護院下に編入されても、地域組織は地域活動運営のために存在し続けると考える。

以上のようにみると、聖護院による支配形成後においても日常的に共に活動する山伏結合が問題処理にあたって、必ず

しも聖護院の下知を受けて解決するものではなかったといえる。そして結局のところ、当事者間で解決する姿が確認できることから、長谷川氏の指摘するように、聖護院が「受動的な権威提供者にとどまらず、在地に形成された慣行を自ら設定したものであるかのように転化させ、能動的に自己の権能として行使した」とはいえないと考える。

本章で明らかにしたことをまとめると、(1) 熊野先達に対しては、聖護院の能動的・積極的に関与する姿勢が確認でき、緊密な支配を行っていた。(2) 寺内山伏集団に対しては、要請に応じて沙汰を出すという消極的な姿勢をとり、その裁許も必ずしも大きな影響を与えはしなかった。聖護院の裁許によらずに相論解決をする山伏の姿からは、聖護院の緩やかな支配が窺える。

では、熊野先達と寺内山伏集団では何故このような差がみられるのだろうか。最も大きな要因は、聖護院の権利を侵害する可能性があるか否かという点ではないだろうか。熊野先達の支配は、上洛の際の御礼・上分物など、直接経済的利益に結びつくものを義務として課していた。聖護院側は、その収益が得られない場合、数度にわたって催促を続けていた。また、熊野を訪れる先達については、聖護院側で参詣の有無の確認が可能である点から、聖護院の意思次第で能動的に関与することが可能であった。そして聖護院は先達職補任を積極的に行い、同時に解任権を得ることで、先達に対する支配を緊密なものとすることに成功したものと考える。

一方、寺内山伏集団については、特に上納などの義務を課しておらず、聖護院側としてもその掌握に積極的になる必要がなかったのだろう。また、定期的な熊野参詣があるわけでもないため、在地から報告・訴えでもない限り、各地域の事情を聖護院側が把握するのが困難であることなどが、寺内山伏集団に対する支配が緩やかとなった要因と考える。また、先達職没収と違い、地域の山伏をその集団から除外する命令を出したとしても、聖護院が監視できるものではなく、結局は在地が受け入れるかどうかが大きく左右し、その処理如何については在地山伏集団次第だった。そして、それは聖護院の権利を侵害するものではなかったため、聖護院としても追求しなかったのだろう。

以上の違いが、先達と寺内山伏との間にみえる聖護院の支配形態の違いとなってみえるのだと考える。

## 第二章 組織化と寺内・寺院間秩序の関係

### 第一節 山伏組織化と衆徒

享徳三年（一四五三）、摂津国勝尾寺は守護方から謂れない要脚を課され、寺僧が寺から退散するという状態にあった。<sup>(77)</sup>そこで山伏は、管領への取次ぎを聖護院へ願ひ出ている。本来は、寺院運営の中心にある寺僧が解決すべき問題であるが、寺僧退散という事態によって山伏が解決しようとしているのである。山伏と聖護院のつながりは、寺僧による寺院運営が困難になった時に生かされているといえるだろう。なお、勝尾寺「寺僧」は「衆徒」と表現されることもあるので<sup>(78)</sup>同義と考えられる。

長谷川賢二氏は、勝尾寺山伏のこの行動を根拠の一つとして本山派の山伏組織化の特質について「山伏の分離はかえって組織の運用・維持の柔軟化を可能にし、衆徒側からも容認される性格のもの<sup>(79)</sup>と指摘している。この指摘はもつともであるが、さらに踏み込んで、衆徒が山伏と聖護院の関係を積極的に利用していたとは考えられないだろうか。また、山伏と聖護院のつながりに関して、衆徒は関与していないように思われるが、これからみていくように、聖護院とのつながりは山伏だけではなかった点を考えると、所属寺院と聖護院の関係についても検討しなければならないだろう。

ところで、観音寺には寺僧と、寺僧の下位身分の山伏がおり、山伏は寺内身分として寺内に包摂されながらも寺僧とは別個に集団を形成していた。そして寺僧と衆徒とは同義であるという。<sup>(80)</sup>前章第二節でみたように、弥高寺・長尾寺・太平寺についても、山伏とそれに対する寺院運営の中心にいると考えられる寺僧が確認できた。他の三ヶ寺についても、恐ら

くは観音寺と同様に寺僧・山伏という、大きく二つの集団で構成されていたのではないかと考える。また、観音寺同様に山伏に対する存在として「衆徒」が確認できるので、寺僧と衆徒とは同義と考える。そこで本節では、寺僧・衆徒は特に区別せずに用いることとする。

前章第二節でみた一宿相論では、聖護院と観音寺・弥高寺が関係をもっていることが確認できたが、本節では、主に相論当事者として動いていた集団はどこであるかということを追っていくことで、真の相論当事者を明らかにしたいと思う。

### 【史料十三】

近江国坂田郡伊吹山太平寺・長尾寺・<sup>(音脱)</sup>観寺等三箇寺山伏等謹言上、

欲<sup>(募カ)</sup>早蒙<sup>(意)</sup>檢校御成敗<sup>(殿カ)</sup>被<sup>レ</sup>停<sup>レ</sup>止弥高寺監訴、如<sup>レ</sup>先規以<sup>レ</sup>三宮<sup>レ</sup>為<sup>レ</sup>一宿、遂<sup>中</sup>大乘峯斗敷上事

右、謹慕<sup>(募カ)</sup>行者之旧殿、自<sup>レ</sup>昔至今四ヶ寺山伏等、以<sup>レ</sup>三宮<sup>レ</sup>為<sup>レ</sup>一宿、入峯斗敷之条、無<sup>レ</sup>異論<sup>レ</sup>之處、弥高寺寺僧等、

背<sup>(念カ)</sup>先規任<sup>レ</sup>雅意、以<sup>レ</sup>吾寺<sup>レ</sup>構<sup>レ</sup>巡道之新儀之間、雖<sup>レ</sup>及<sup>レ</sup>三ヶ寺之群議、更以<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>令<sup>レ</sup>承引。結句属<sup>レ</sup>守護被官之

仁、<sup>(異筆)</sup>啓<sup>(意)</sup>致<sup>レ</sup>無理之沙汰之間、偏奉<sup>レ</sup>憑<sup>レ</sup>檢校御下知、如<sup>レ</sup>元為<sup>レ</sup>遂<sup>レ</sup>入峯修行、謹以言上如<sup>レ</sup>件。

〔應永七年八月 日〕

これは、弥高寺を除く三ヶ寺が、檢校、すなわち熊野三山檢校の聖護院に出した申状である。古来より四ヶ寺の山伏は、三宮を「一宿」として斗敷を行っていた。ところが、弥高寺寺僧が先規に背いて弥高寺を一宿とした斗敷ルートを構えた。これにより三ヶ寺は群議を行い、弥高寺の説得を試みるも弥高寺は承引せず、守護被官の者を頼って無理の沙汰、つまり強引に弥高寺を一宿としたため、三ヶ寺山伏の入峯修行もままならない状態となっていた。

これは、斗敷修行に関する相論であるが、そもそも一宿に異議を唱え、守護被官を頼って四ヶ寺の歩調を乱したのは弥

高寺の寺僧であつたことに注目したい。【史料六】でみたように、この訴えに対して聖護院は、弥高寺・長尾寺山伏の当道職を解却すること、三宮を一宿とする旨の裁許を行った。聖護院による処分の対象は、弥高寺・長尾寺の「山伏」になっている。本来は寺僧が当事者として然るべきであるが、山伏が処分対象として、相論当事者となっているのである。応永十一年（一四〇四）、これに対して弥高寺は伊崎寺五ヶ寺の協力を得た上で、聖護院へ訴え出た。その伊崎寺五ヶ寺の協力にあたるものが次の史料である。

【史料十四】

（端裏書）

「伊崎寺五ヶ寺状案

進上候、

自「弥高寺」聖護院殿へ」

伊福貴山大乗峯一宿相論事、任「先例」以「弥高護国寺」、可「為」一宿之旨、云「公方」、云「国中」、無「子細」上者、於「向後」不「可」及「違乱」者也。依「衆儀」所「定如」件。

応永十一年九月十八日

弥高寺客僧中

伊巖屋山伊崎寺

阿弥陀寺 在判

長命寺 在判

安楽寺 在判

石馬寺 在判

千手寺 在判

（83）

伊崎寺は現在、近江八幡市白王町に位置する。「伊崎寺縁起」<sup>(84)</sup>によると、開基は役小角で、比叡山における回峯行の祖とされる相応和尚の練行の地であった。相応が一本から三体の不動明王像を造ったうちの一体を本尊としており、残りは葛川明王院と無動寺の本尊といわれることから、天台比良修験道の影響を大きく受けた寺院であることが分かる。一方の五ヶ寺については、「伊崎寺縁起」によると、相応和尚練行の時、奉仕していた行人の中にいた五輩の近習が、五ヶ寺の開基であるという。<sup>(85)</sup>五ヶ寺は縁起の中で「大勧進五箇寺」<sup>(86)</sup>とみえるので、伊崎寺を中心とした連携が窺える。

葛川明王院とは背後に比良山を負い、古くから天台修験の道場・別院として天台回峯行の中心地であった。その葛川明王院に残された『葛川明王院文書』から、五ヶ寺と伊崎寺が毎年葛川明王院に回峯行のために下向してくる山門行者に対して、樽・茄子・昆布などを進上する姿が確認できる。<sup>(87)</sup>その中身は、ほぼ同じ品目であるが、五ヶ寺の進上物に比べると伊崎寺の進上物の方が多い。よって、伊崎寺と五ヶ寺は同等ではなく、伊崎寺が伊崎寺五ヶ寺の中心的存在であったと考える。また、五ヶ寺は五ヶ寺で山門と接触をしていることから、<sup>(88)</sup>「伊崎寺五ヶ寺」の中でも五ヶ寺は行動を共にすることが多かったであろう。伊崎寺五ヶ寺は、山門行者に対して進上するだけではなく、鳥目三十疋を毎年山門行者から受け取るようになっていたので、天台回峯行をめぐる山門側と何らかの関係を結び、その運営に携わっていたものと思われる。したがって、伊崎寺五ヶ寺は、明王院を中心とした葛川修験道に關与する一派閥として存在していたと考える。ここで弥高寺が伊崎寺五ヶ寺の協力を得た理由とは、足並みの揃わない一国山伏の同意が得られないことから、一国山伏外の第三者に証言させることで、伊吹山を修行場とする国中山伏の意向が弥高寺を一宿とすることにあり、ということであることを強調するためと考える。

さて、【史料十四】の宛名には「弥高寺客僧中」とあり、依然山伏が相論当事者となつていてと考えられる。そして応永十三年、それに対して聖護院側からは、弥高寺を一宿とする旨の御教書が出された。<sup>(89)</sup>その宛名はやはり「弥高寺山伏」であり、山伏が相論当事者となっている。

ところが、この後再び当事者として寺僧が登場する。【史料七】でみたように、応永十三年をさほど下らない年に、太平寺・観音寺衆徒が入峯する山伏の道具を奪取するなどの種々の狼藉について、弥高寺衆徒が乗々院奉行所に対して訴えた。注目したいのは、これまで弥高寺山伏が窓口となつて聖護院側と関係を持っていたのが、ここでは衆徒が当事者となつて聖護院側へ訴え出ている点である。この相論は最終的には永享十年（一四三八）弥高寺が譲歩し、伊吹社長者の承認を得て四ヶ寺衆徒らの立ち合いのもとで和解となつた。その際の長者からの書状の宛名は「衆徒」<sup>(90)</sup>となつていたのである。よつてここまでの検討から、相論当事者は、衆徒↓山伏↓衆徒と変化していることがわかつた。このことは何を示すのだろうか。

そこで、前章でみた一宿相論解決時の四ヶ寺間の状態を再び思い出そう。相論開始から四ヶ寺の歩調は乱れており、本来四ヶ寺が共同で行つていた伊吹山の社役は弥高寺を除く三ヶ寺で行うという状況が続いていた。そこへ相論が解決したことで、伊吹社の遷宮などについて四ヶ寺が一味となつて行うこととなつた。

注目したいのは、一宿相論の解決が四ヶ寺全体の問題の解決になつたという点である。一宿は経済的利益を生み出すものであつたこと、弥高寺寺僧が一宿に異論を唱えたということを考えると、一宿がどこであるかは寺院運営に大きく関与する問題であつたと思われる。よつて、一宿相論は寺院運営・経済を左右する問題、つまり寺院運営の中心にいる衆徒同士の問題として浮上したものであり、山伏間の問題として起きたものではないと考えられる。そして、社役をはじめとした伊吹社の運営を相論以来、弥高寺を除く三ヶ寺で行つていたことを考えると、山伏が相論当事者となつていた間も変わらず、山伏間の問題ではなく、寺院運営を左右する衆徒同士の問題とされていたといえる。この相論は、永享年間に至るまで変わらず寺院全体に関わるものとして衆徒が抱える問題だつたのだろう。とするならば、山伏が相論の前面にみえるのは、山伏が衆徒のかわりとして相論を担当していたということではないだろうか。

相論の原因を作つたのは寺僧であつた点、また聖護院より弥高寺を一宿とする旨の裁許が出された後、【史料七】で峯

入の山伏の道具を奪取するなどの行動を起しているのが、観音寺・太平寺の山伏ではなく衆徒である点、「敵方衆徒等持向、致「噉々沙汰」之間」とあり弥高寺側は敵方を主に衆徒と捉えており、噉々沙汰するのが衆徒であった点などからは、一宿をめぐって積極的に行動を起していた主体は衆徒・寺僧だったといえるだろう。つまり、山伏が相論当事者となっていたものの、その間の山伏の行動とは、衆徒の意向を受けてのものであり、衆徒の策の一つであったと推察する。そして、最終的には衆徒同士で解決した点を考えると、相論が始まった当初から解決に至るまで、真の相論主体は衆徒・寺僧であったと考えたい。

このように、一宿相論は、一見すると山伏が前面に出ているため、山伏間相論であるようにみえる。しかし、これは衆徒同士の問題であり、終始衆徒が相論の真の当事者として主導していたことを踏まえると、この問題を解決しようと聖護院という上部権力者へ訴え出た山伏の行動は、衆徒容認のものであったといえるのではないだろうか。よって、相論解決のために起した山伏の聖護院へ裁許を求めるという行動は、山伏自らの意向というよりは、むしろ衆徒の策によるものであったのではないかと考える。

## 第二節 衆徒と聖護院の関係

以上みてきたように、この相論において山伏が相論の前面に出ていることから、これまでの研究では衆徒の存在にあまり目が向けられることはなかったが、衆徒こそが相論の主体であったことを確認した。そして、山伏が聖護院の権力を頼って沙汰を求める姿は、衆徒主導のもとでの行動であり、衆徒が積極的に山伏と聖護院のつながりを活用した結果のものと考ええる。

ところで、【史料七】にみえるように、この相論では山伏だけではなく寺僧と聖護院との結びつきも確認できる。山伏

にかわって、弥高寺衆徒が聖護院へ訴え出ているところから、所属寺院は山伏を介して聖護院の權威を利用するだけでなく、衆徒と聖護院のつながりをも形成させることとなったと考えられる。このような例は、この他にもみることができる。勝尾寺の例をみたい。

応永八年（一四〇一）以降、勝尾寺では宿久荘官らによる寺領山林四至への侵害が起こっていた。守護に対し宿久荘官が訴え出たのに対して、勝尾寺も証拠文書を提出して対応していた。しかし、この裁定はなかなか下らず、勝尾寺は「此上者一行可給之由申之処」<sup>上</sup>、自「聖護院殿被仰出子細」候」と聖護院に訴え出ている。その数日後には荘官らが武装して山木を切り取るなどの行為に出、かけつけた山伏を負傷させる事件が起きた。そこで勝尾寺は再び、「仰上裁中間、如此悪行、可有御炳誠之由、対証文訴申聖護院殿之処、証拠明鏡之由、為乗々院殿雖仰出」と、聖護院へ訴え出、下知を受けているのが確認できる。<sup>(91)</sup>

勝尾寺は二回聖護院へ訴え出ているが、後者については山伏が負傷するという事件を受けてのものとも考えられるため、山伏が訴え出たとも考えることが出来るが、この問題は「寺僧等計会周章之刻」、「寺僧等迷惑至極」とあり、寺僧が主体となって動く問題であったとみえることから、聖護院へ訴え出たのは山伏ではなく、寺僧であったと考える。

勝尾寺と聖護院の接触はこれが初見であるため、どのような契機で関係を持ったかは明らかではない。しかし、享徳三年（一四五三）、管領への取次ぎを依頼するために、勝尾寺山伏が聖護院へ申状を提出した際、勝尾寺山伏は「右当寺者、御門跡御入峰之御時、参御同行、奉致奉公」と勝尾寺が聖護院を頼る根拠を、聖護院入峯に同行し奉公した点としていることを考えると、勝尾寺と聖護院のつながりは、入峯を介した山伏と聖護院のつながりが契機であったと考えられる。つまり、応永八年段階にみえる寺僧と聖護院のつながりは、山伏と聖護院の関係がもとにあって形成されたものと考ええる。

このように、勝尾寺では入峯を通じて築かれた聖護院との関係を、山伏だけではなく、寺僧も利用していたことがわかつ

た。よって、寺内山伏集団が聖護院とつながるということは、寺僧と聖護院の関係をも築くことであり、聖護院は寺僧を含みこんで山伏組織編成を行っていたのである。

以上、弥高寺と勝尾寺の例から、山伏と聖護院の関係は、同時に寺僧と聖護院の直接の関係も作り出していたことを確認した。

さて、最後に寺内秩序・寺院間秩序に対する聖護院支配の影響について考察したい。これまでみてきたように、聖護院と寺内山伏集団との関係とは、常に聖護院の承認のもとに行動しなければならないような、日常的で緊密なものではなかった。つまり必要に応じて下知を求めるといった緩やかな従属関係であったという点が、寺内の一組織を聖護院が編成し得た大きな理由と考える。このような聖護院支配の性格は、山伏の所属寺院の運営にまで干渉することはなく、何ら寺内秩序を乱すことはなかったのである。

また、このような聖護院と山伏の関係は、寺僧監視下で所属寺院の訴え出る先の新たなルートとして働いていた。さらには、寺僧と聖護院の直接的なつながりも生み出すこともあり、所属寺院がよりどころとする権力の選択肢を増やすというプラスの効果が大きかった点も挙げられる。

次に寺院間秩序への影響を考えたい。観音寺山伏が聖護院下に入ることにについて、本寺山門から何の関心も寄せられていない点については、たとえ「間隙的」性格の山伏が対象だったとしても、聖護院の支配が強力なものであれば、所属寺院の運営にまで影響を及ぼすものになり兼ねない。地頭大原氏は、観音寺に対して積極的介入を行うなど観音寺を悩ます存在であり、山門との間で訴訟が起きていた。しかしながら、聖護院の受動的な姿勢は、観音寺の運営にまで干渉して観音寺を脅かすことはなかったのである。よって、寺院間秩序に抵触せずに山伏を組織化することができた最も大きな理由は、聖護院の寺内山伏に対する支配の姿勢が消極的で緩やかだった点だろうと考える。

## おわりに

「はじめに」で設定した課題に対する答えは以下のようになった。

(1) 熊野先達に対する聖護院側の支配は緊密なもので、能動的に関与する姿勢をみせていた。また、その沙汰は確実に当事者に影響を及ぼした。一方の寺内山伏については、在地からの要請に応じて沙汰を出すという支配にとどまるもので、聖護院の承認のもとに行動しなければならないようなものではなかったが、その関係こそが「聖護院之下方」と表現される関係であったと考える。よって、先達支配とは異なり寺内山伏に対する支配とは、在地からの要請のない限り聖護院が干渉することのない緩やかなものであった。要請に応じて出されるその沙汰も、必ずしも在地に浸透するものではなかった。

(2) 寺内山伏集団に対する聖護院の支配は(1)に述べたような緩やかなものであり、所属寺院の運営を脅かすことがなかった点が、寺内秩序に抵触せずに山伏組織化を形成できた大きな理由であった。また、山伏と聖護院のつながりは寺僧主導のもとで利用できた点、さらにはそれを契機として寺僧自体も直接聖護院と関係を持つことが出来るようになった点は、所属寺院にとってはむしろ有益であった。

本寺が聖護院と山伏の関係を危険視しなかったのは、聖護院と山伏・その所属寺院とのつながりが緩やかなもので、寺内秩序を乱し山伏所属寺院の運営を脅かすような危険性がなく、ましてや本末関係を乱すような能動かつ積極的なものではなかったからと考える。

ところで、鎌倉後期には、二上岩屋大念仏を介した幾つかの寺院に所属する山伏の結合が確認されている。<sup>(93)</sup> その結合は宗派に拠らないものであった。また阿波国にみえる山伏結合も天台・真言が混ざり合ったものであったことが指摘されて

いる。<sup>(94)</sup> 本山派編成の動きがある以前の鎌倉後期から、既に山伏らは自主的に宗派によらない横のつながりを持っていたと考えられる。

寺院では、行人・禅衆と呼ばれる身分層の者同士の結合、また他寺・他宗僧との交流を禁じられている。<sup>(95)</sup> このような禁制の存在は、行人・禅衆層の結合や、他寺僧と交流がよく見られる現象であったことを裏付ける。このように禁制がなされる中で、何故宗派を越えた山伏同士の横のつながりが形成されたのだろうか。

本稿は、聖護院による山伏の組織化が可能であった点について、聖護院の支配形態と、その所属する寺院との関係から考察を行ったが、聖護院が山伏組織を形成し得た根底には、そもそも宗派を問わない山伏のつながりが形成された理由があるように思う。そしてそれを明らかにするには、山伏を含む行人・禅衆身分層の寺内・外の活動を考えていく必要があるであろう。これらの問題については、改めて検討の機会を持ちたい。

## 註

- (1) 三宅克広「中世後期の山伏と東寺―東寺・新熊野神社・備前児島五流をめぐって―」(中野栄夫編『日本中世の政治と社会』所収、吉川弘文館、二〇〇三年)。
- (2) 安田次郎「寺院と地域社会」(シンポジウム「多聞院英俊の時代」実行委員会編『多聞院英俊の時代』所収、二〇〇一年)。
- (3) 関口真規子「醍醐寺と『当山』派」(『山岳修験』二五号、二〇〇〇年)。同「中世修験道における永久寺先達」(『山岳修験』三三三号、二〇〇四年)。
- (4) 長谷川賢二「中世後期における顕密寺社組織の再編―修験道本山派の成立をめぐって―」(『ヒストリア』一二五号、一九八九年)以降、長谷川論文Aとする。
- (5) 大石雅章「寺院と中世社会」(『日本中世社会と寺院』所収、清文堂出版、二〇〇四年、初出一九九四年)。
- (6) 「大乘院寺社雑事記」明応元年八月二十二日条(増補続史料大成『大乘院寺社雑事記』十、一九一頁、上段)。
- (7) 根来寺と修験については、小山靖憲「根来寺と葛城修験」(『中世寺社と荘園制』所収、塙書房、一九九八年、初出一九八一年)がある。

(8) 前掲註(6) 史料。

(9) 和泉国犬鳴山七宝瀧寺のように寺院の構成員全員が山伏という事例もあるが、本稿では組織化と寺内秩序との関係を論じるので、寺内で一組織を形成している山伏に着目したい。

(10) 長谷川論文A、同「中世後期における寺院秩序と修驗道」(『日本史研究』三三六号、一九九〇年)以降Bとする。

同「中世における熊野先達支配について」(『山岳修驗』一四号、一九九四年)以降Cとする。なお長谷川論文Bをまとめたものとして「中世の伊吹山と山伏」『大原観音寺文書』が語ること」(市立長浜歴史博物館編『近江湖北の山岳信仰』、市立長浜城歴史博物館・サンライズ出版、二〇〇五年)がある。

(11) 『観音寺文書』については滋賀県教育委員会の調査による釈文が①『大原観音寺文書』(『滋賀県古文書等緊急調査報告』二、滋賀県教育委員会、一九七五年)に掲載されている。また『山東町史』史料編(一九八六年)にはその大多数が活字化されている。一方、②一九八二年から始められた福田榮次郎氏による調査で作成された総目録(福田榮次郎研究代表「中世・近世地方寺社史料の収集と史料学的研究」『大原観音寺文書』を初めとする近江国坂田郡内寺社の悉皆的研究―、平成六―八年度科学研究費補助金(一般研究(B))研究成果報告書、一九九八年)をもとに、承安四年(一一七四)から康正二年(一一四五)までが「近

江大原観音寺文書」第一(群書類従完成会、二〇〇〇年)として刊行されている。史料番号に食い違いが生じるので、本稿では、『観音寺文書』①の文書番号(②の文書番号)というように表記する。なお、文字の確認等は東京大学史料編纂所所蔵の写真帳で行った。

(12) 『観音寺文書』一三四号(二三三三)。

(13) 長谷川論文B。

(14) 小山貴子「中世の寺院における山伏の実態について―撰津国勝尾寺を題材に―」(『風俗史学』一八、二〇〇二年、二一頁)。

(15) 勝尾寺に「山伏」が集団として成立していた正和元年(一一三二)に、僧覚賢という人物は「(前略)既入修驗之道、遠者載權現金剛童子之徳、近者、仰本尊千手千顔之恵、生前願望在于斯、生後之資糧、豈不貯乎(後略)」(正和元年六月十八日僧覚賢田地寄進状(『勝尾寺文書』四五三三)〔箕面市史〕史料編一、二八九頁)とあるように山伏であった。また、覚賢については「栴本坊、東座有職始也」(同)九四四号(『同』史料編二、二五七頁)とあることから、栴本坊所属の山伏であったことがわかる。

(16) 新城美恵子「聖護院系教派修驗道成立の過程」(『本山派修驗と熊野先達』所収、岩田書院、一九九九年、初出一九八〇年、四三頁)。

(17) 新城同右論文。

(18) 石倉孝祐「中世後期における聖護院在地支配の展開―

磐城地方の動向を中心に」(『神道宗教』一四五号、一九九一年)。

(19) 長谷川論文C。

(20) 「八槻文書」三四号(『棚倉町史』二、七八九頁)。

(21) 「同右」三八号(『同右』二、七九三頁)。

(22) 「同右」中に散見する。例えば三二、三五一三七号など(『同右』)。

(23) 長谷川論文C、新城美恵子「補任状から見た修験道本山派の組織構造——中世から近世へ——」(前掲註(16) 著書所収、初出一九九四年)。

(24) 藤田定興「八講山信仰と近津修験」(『日光山と関東の修験道』(『山岳宗教史研究叢書』八) 所収、名著出版、一九七九年)。

(25) 「八槻文書」四二号(『棚倉町史』二、七九七頁)。

(26) 「大嶋之事者、代々八槻之別当之依<sub>レ</sub>為<sub>二</sub>御弟子<sub>一</sub>」(『八槻文書』四五号(『同右』二、八〇〇頁))。

(27) 「同右」四〇号(『同右』二、七九五頁)。

(28) 「同右」三七号(『同右』二、七九二頁)。

(29) 新城前掲註(16) 論文、四一頁。

(30) 「八槻文書」三五号(『棚倉町史』二、七九〇頁)。

(31) 「同右」三七号(『同右』二、七九二頁)。

(32) 長谷川論文C、七七頁。

(33) 「八槻文書」四三号(『棚倉町史』二、七九八頁)。

(34) 「同右」五一号(『同右』二、八〇六頁)。

(35) この後、明応八年(一一四九九)に聖護院は竹貫別当に對して石川一家の先達職を与えている。その際「熊野參詣先達職之事、先師民部卿有印致<sub>二</sub>緩怠<sub>一</sub>、依<sub>レ</sub>令<sub>二</sub>自滅<sub>一</sub>、雖<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>没<sub>二</sub>取彼職<sub>一</sub>、頗嘆申条、如<sub>レ</sub>元、被<sub>レ</sub>仰付」(『石川頼賢文書』二号(『福島県史』七、五五六頁))とあり、明応八年段階の竹貫別当の先師である竹貫別当は、民部卿有印という人物であったことがわかる。また、南北朝期の八大院石川別当義尊も民部と称していた(新城前掲註(16) 論文、四一頁)。よって、竹貫別当は代々「民部」を称していた可能性も考えられるであろう。

(36) 「八槻文書」四八号(『棚倉町史』二、八〇三頁)。

(37) 「石川頼賢文書」二号(『福島県史』七、五五六頁)。

(38) 直接支配を行った例として、応永二十五年(一四一八)三月二十七日、乗々院により足摺山蹉跎院主に土佐国播多荘内の檀那の先達職を与えたもの、応永三十年八月八日、乗々院により奥州蒲倉大祥院侍徒阿闍梨に田村莊司遠末一家の先達職を安堵したもの、寛正三年(一四六二)乗々院により出羽国秋田郡仙北北浦の上野公知行分の先達を安堵したもの、二位公行蓮に出羽国平賀郡の油河輩の先達職を安堵したものなどがある。(宮家準「教派修験の成立と展開」(『修験道組織の研究』所収、春秋社、一九九九年、五五一頁)。

(39) 「八槻文書」四四号(『棚倉町史』二、七九九頁)。

(40) 「同右」四八号(『同右』二、八〇三頁)。

- (41) 増山智宏「中世修験道本山派形成過程の再検討」(『史苑』六四—一、二〇〇三年)。
- (42) 湯浅治久「公方」大原氏と地域社会」(『中世後期の地域と在地領主』所収、吉川弘文館、二〇〇二年)。
- (43) 『観音寺文書』四三三号(五一号)。
- (44) 『同右』四三三号(三八号)、四七八号(一六八号)。
- (45) 伊吹山、伊吹山護国寺に関する概要是満田良順「伊吹山の修験道」(五来重編『近畿霊山と修験道』(山岳宗教史研究叢書 十一) 所収、名著出版、一九八六年)、「中世の宗教」(『山東町史』本編、一九九一年)、「鎌倉期の四護国寺」(『四護国寺と南北朝』(『伊吹町史』通史編上、一九九七年)、平凡社地方資料センター編『滋賀県の地名』(『日本歴史地名大系』二五、平凡社、一九九一年) など参照。
- (46) 『観音寺文書』四三三号(三八号)。
- (47) 『同右』一二六号(一一七・一一六号)。
- (48) 「碑伝」の項(宮家準編『修験道辞典』、東京堂出版、一九八六年)。
- (49) 『伊吹町史』通史編上(一九九七年、二二二頁)、増山前掲註(41) 論文、六六頁。
- (50) 長谷川論文B、五一頁。
- (51) 「向井家文書」四八・六八号(『和歌山県史』中世史料二)。
- (52) 長谷川論文A、六七頁。
- (53) 増山前掲註(41) 論文、六一頁。

- (54) 『観音寺文書』四七六号(一一四号)。
- (55) 『同右』一二八号(一二七号)。
- (56) 『同右』一二二二号(五四四号)。
- (57) 『同右』一二九号(一六六号)。
- (58) 『同右』四七八号(一六八号)。
- (59) 長谷川論文B。
- (60) 増山前掲註(41) 論文。
- (61) 『観音寺文書』一三四号(二三三号)。
- (62) 長谷川論文B、四七頁。
- (63) 『観音寺文書』一三三三号(一九五号)。
- (64) 長谷川論文A・B。
- (65) 一 国山伏を構成する二十二ヶ寺を所在地と共に次に挙げる(順は史料の通り)。
- (1) 敏満寺(犬上郡多賀町) (2) 池寺(西明寺)(犬上郡東甲良町) (3) 松尾寺(愛知郡愛荘町松尾寺) (4) 百済寺(愛知郡角井町) (5) 石塔寺(東近江市石塔町) (6) 観音寺(蒲生郡安土町) (7) 長光寺(近江八幡市長光寺町) (8) 弥高寺 (9) 太平寺 (10) 長尾寺(跡地を含めて三ヶ寺共に米原市伊吹) (11) 清滝寺(米原市柏原) (12) 醍醐寺(長浜市醍醐) (13) 大聖寺(長浜市草野) (14) 大吉寺(長浜市野瀬) (15) 己高山鶏足寺(伊香郡木之本町古橋) (16) 菅山寺(同郡余呉町) (17) 竹生島(長浜市早崎町) (18) 日光寺(米原市日光寺) (19) 松尾寺(米原市上丹生) (20) 富(布) 施寺(長浜市布勢町) (21) 名超寺(長浜市

名越町) (22) 大覚寺 (東近江市大覚寺)。

【平凡社地方資料センター編『滋賀県の地名』(『日本歴史地名体系』二五、平凡社、一九九一年)、「中世の宗教」

『山東町史』本編、四一五頁) 参照】。

(66) 『観音寺文書』二二四号(八九号)。

(67) 発給者の確定は困難であるが、御書下によって一國山伏の蜂起があったこと、両方対決が行われるまでになったことを考えると、御書下の発給者はある程度の影響を与える政治力を持った者と考えられる。また、その内容は、書下を受けて蜂起があったことから、行信と対立する「山伏衆中」にとって不都合な内容と思われる。

(68) 署判寺院の中に「観音寺」がみえるが、この観音寺は現安土町の観音寺と考える。増山氏によると、紙継目は長光寺と弥高寺の間にあり、しかもそれは実際の寺院の位置関係と一致し、一紙目が湖東寺院、二紙目が湖北寺院であるという(前掲註(41) 論文)。よって「観音寺」は湖東に存在する観音寺と考えてよいだろう。

(69) 増山氏は本文中にある「山伏衆中」は一國山伏によって構成されていると指摘している(前掲註(41) 論文、六〇頁)。しかしながら、差出人に「山伏衆中」という語がみえ、また国中の諸寺所属の山伏は一國山伏という別の表現をしていることを考えると、本文の「山伏衆中」は差出人「山伏衆中」と同一団体を指すものと考えるのが自然な解釈ではないだろうか。よって、当道衆から行信を追放

したのは観音寺山伏衆中と考える。

(70) 長谷川論文A、五九頁。B、四三頁。

(71) 増山前掲註(41) 論文、六一頁。

(72) 二十二ヶ寺のうち、十ヶ寺に熊野先達が確認できるところが長谷川氏によって指摘されている(長谷川論文B、四二―三、四九―五〇頁)。だが、そのうちの弥高寺・長尾寺については、【史料六】で弥高寺・長尾寺が「解<sub>二</sub>却当道之職<sub>一</sub>」された点を、熊野先達としての職務を解かれたと解釈したことから、弥高寺・長尾寺にも熊野先達が存在したとしている。しかし、前述のように「解<sub>二</sub>却当道之職<sub>一</sub>」は、伊吹山大乗峰からの追放と捉えられるので、弥高寺・長尾寺に熊野先達が存在したとは言い切れないと考える。よってここでは八ヶ寺としておく。

(73) 先行研究でも指摘されているように、『観音寺文書』には、熊野先達が構成員である行者講に関する史料が存在する(『観音寺文書』一二五号(九二号))。よって、熊野先達が存在したことは間違いないだろうと考える。

(74) 『観音寺文書』四三二号(三八号)。

(75) 『同右』四七六号(一一四号)。

(76) 同右史料。

(77) 『勝尾寺文書』九四八号(『箕面市史』史料編二、二六六頁)。

(78) 例えば、延文五年(一二三六〇)、勝尾寺衆徒が寺領安堵を願い出ている(『勝尾寺文書』六九七号(『同右』、七

(4頁)。それに対する論旨の宛名は「勝尾寺々僧等中」(『同右文書』六九八号(『同右』、七五頁))となっていることから、衆徒Ⅱ寺僧であると考えることができる。

(79) 長谷川論文B。

(80) 長谷川論文B、三五頁。

(81) 『観音寺文書』四七八号(一六八号)。

(82) 『同右』四七六号(一一四号)。

(83) 『同右』一二七号(一二三三号)。

(84) 「伊崎寺縁起」(中川泉三編『近江蒲生郡志』七、二五三七号、一九二二年、二四二頁)。

(85) 「伊崎寺」の項(平凡社地方資料センター編『滋賀県の地名』(『日本歴史地名体系』二五)、平凡社、一九九一年)。

(86) 前掲註(84)史料、二四九頁。

(87) 『葛川明王院文書』の中で、五ヶ寺に関する文書は、永祿二年七月二十一日付の「五ヶ寺連署状」(『葛川明王院所蔵史料』五五五号(『同』所収、三六〇頁))が一通存在するほか、近世になり書写されたものが「行者大帳議定抜書」(『葛川明王院所蔵史料』五六六号(『同』所収、三八二頁))として存在する。この抜書には、失われてしまったと思われる山門行者から五ヶ寺使節宛てのものがあり、五ヶ寺と共に伊崎寺も山門行者と関係があったことが判明する。

(88) 同右史料。

(89) 『観音寺文書』一二八号(一二七号)。

(90) 『同右』一二九号(一六六号)。宛名は「衆徒」の上が虫食いのため分らないが、観音寺衆徒宛てと考えてよいと考える。

(91) 「勝尾寺文書」七九九号(『箕面市史』史料編二、一四〇頁)。相論の経過についてはこの史料に記されている。

(92) 「同右」九四八号(『同右』史料編二、二六六頁)。

(93) 徳永誓子「修験道当山派と興福寺堂衆」(『日本史研究』四三五号、一九九八年)。

(94) 長谷川賢二「修験道本山派形成の動向と四国地方の山伏―土佐・阿波の場合―」(『四国中世史研究』二、一九九二年、四五頁)、同「中世阿波の山伏集団に関する問題―二系列集団対抗論への疑問―」(『四国中世史研究』三、一九九五年、四六頁)など。

(95) 例えば承久四年(一二二二)正月には、興福寺東西金堂衆の東大寺法花堂衆兼行の禁止(『東大寺文書』一四八号)が確認でき、堂衆は必ずしも本寺に拘束されない所属形態を持っていたという(永村眞「寺内階層の形成」(『中世東大寺の組織と経営』所収、塙書房、一九八九年、四四〇―五三頁)。そのほか「建久二年六月一日僧阿観置文」(『金剛寺文書』三〇号)では他宗と交わることを禁止している。

(お茶の水女子大学大学院博士後期課程)